

「最後の晚餐」をパロディにした政治風刺画「最後のG7」は何を物語るか



木村 正人
在英国際ジャーナリスト

ジョー・バイデン米大統領が6月、初の外遊で欧州を訪れ、先進7カ国首脳会議（G7サミット）、北大西洋条約機構（NATO）首脳会議、米トルコ首脳会談、米露首脳会談に臨んだ。バイデン大統領は4月に日本の菅義偉首相、5月に韓国の文在寅大統領とワシントンで会談した。中露の横暴を抑えるため、トランプ前政権時代に崩れた自由主義陣営の結束回復を目指しているが、中国の引力はますます強大になっている。

「最後のG7」

バイデン大統領がG7やNATOサミットを通じて、いくら自由主義陣営の結束を演出しようとしても、米欧が「同床異夢」なのはもはや隠しようがない。すでにご覧になった方もおられるかもしれないが、中国共産党系メディアの『環球時報』英語版は、ルネサンス期を代表する巨匠レオナルド・ダ・ビンチの「最後の晚餐（ばんさん）」をパロディにした政治風刺画を「最後のG7」として紹介した。

作者がミニブログ新浪微博に投稿し、中国のSNS上

で話題になったそうだ。G7には韓国、オーストラリア、インド、南アフリカも招かれたが、「最後のG7」には韓国と南アの首脳は描かれていない。完全に中国側という意味だろう。風刺画には中国の地図をあしらったケーキが描かれ、「これ（G7）を通じて私たちはまだ世界を支配できる」と書かれている。

中国ネット民のひとりはこちら解説している。星条旗の山高帽をかぶった白頭鷺は「最後の晚餐」のイエスのように真ん中に座り、紙幣印刷機で刷った米ドルの札束と黒人奴隷を連想させる血染めの綿花を机の上に放り出す。右隣にはアングロサクソンの獅子（英国）、中国通信機器大手、華為技術（ファーウェイ）の最高財務責任者、孟晩舟氏とみられる人形をつかむヌートリア（カナダ）が控える。

白頭鷺の隣の狼（イタリア）は中国の一带一路を承認しており、両手で米国の対中強硬外交は「どうか、ご勘弁を」というシグナルを送る。狼の隣の秋田犬（日本）は他の動物のグラスに「福島原発の処理水」とみられる緑色の液体を注いでいる。その隣のカンガルー（オーストラリア）はドルの札束に左手を伸ばす一方



中国のSNSに投稿されたG7の政治風刺画（『環球時報』英語版サイトより）

で、対中貿易で稼いだ金袋を握りしめる。

左端の黒鷲（ドイツ）は白頭鷲とは距離を置き、右端の雄鶏（フランス）はアゴに手をやり思案する。コロナ危機に苦しむ象（インド）は病人のごとく点滴を受けている。しかし実際の状況は微妙に異なり、この風刺画は中国共産党の希望的観測を表現しているにすぎない。オーストラリアはアングロサクソンの対中強硬外交を主導し、イタリアは中国の一带一路を警戒し始めている。

ドイツ総選挙で巻き返すCDUのラシェット候補

バイデン大統領の欧州外交は始まったばかりだ。そして欧州は9月にドイツ総選挙、来年4月にフランス大統領選を控えている。2009年のギリシャ財政粉飾が火種となった欧州債務危機以降、欧州政治を主導してきたアンゲラ・メルケル独首相が引退し、その後、誰がドイツの首相になるかで対中国、対ロシアの外交政策は微妙に軌道修正されるだろう。

世論調査で一時首位に立った90年連合・緑の党は失速し、メルケル路線を継承するキリスト教民主・社会同盟（CDU/CSU）のアルミン・ラシェット統一首相候補が巻き返している。6月の独東部ザクセン・アンハルト州議会選挙でCDUは戦前の予想を覆して極右政党「ドイツのための選択肢」を大きく引き離して首位を守った。

欧州連合（EU）の欧州委員長にドイツのウルズラ・フォンデアライエン前国防相が就任したことからもわかるように欧州政治もCDUを中心に回転する。そのドイツ政治は自動車産業を中心とした製造業と密接にかかわっており、自動車の現地生産・販売を依存する中国や、資源の輸入元、製品の輸出先であるロシアには強く出られないという弱みがある。

EU27カ国の巨大市場、規制を方向づける政治力、単一通貨ユーロというドイツの実力から見れば「弱い通貨」、そして中国とロシアがドイツ経済の強力な原動力だ。

バイデン大統領の欧州歴訪後、ラシェット氏は英紙『フィナンシャル・タイムズ（FT）』のインタビューで、コロナ後の経済復興で求められるのはポピュリズムではなく堅実な政治手腕だと強調し、「ドイツの競争力を損なうことのない温暖化政策を実現できるのは誰だ」と問いかけた。そのためにもドイツ最大の貿易相手となった中国との関係を損なうわけにはいかない。

中国は「パートナー」「競争相手」「体系的ライバル」

香港民主派や新疆ウイグル自治区少数民族の弾圧に対する国際的な批判が高まるなか、メルケル首相は4月に6度目となる中国との政府間協議をオンラインで行った。ドイツもEUと同じように中国を「交渉のパートナー」「経済の競争相手」「体制が異なる体系的ライバル」と位置付ける。これが対中外交の柱である。ラシェット氏はFT紙に欧州の多くの国がバイデン大統領の対中タカ派外交には懐疑的だとおわせた。

そして「ロシアを無視することは私たち欧州にとっても米国にとってもプラスにならなかった」と、バルト海底を経由してロシアの天然ガスをドイツに送るパイプライン計画「ノルドストリーム2」を支持した。原発廃止、石炭火力発電からの脱却が迫るなか、「2045年実質排出ゼロ」を掲げるドイツにとって二酸化炭素排出量が少ない天然ガスは貴重なエネルギー源だ。

英最新鋭空母クイーン・エリザベス（QE）の空母打撃群が極東に派遣され、米海軍ミサイル駆逐艦と海兵隊のステルス戦闘機F35B、オランダ海軍のフリゲート艦も参加する。ドイツは南シナ海にフリゲート艦を派遣するものの、QEとは完全に別ルートを進み、上海に寄港させるというどっちつかずの態度をとった。

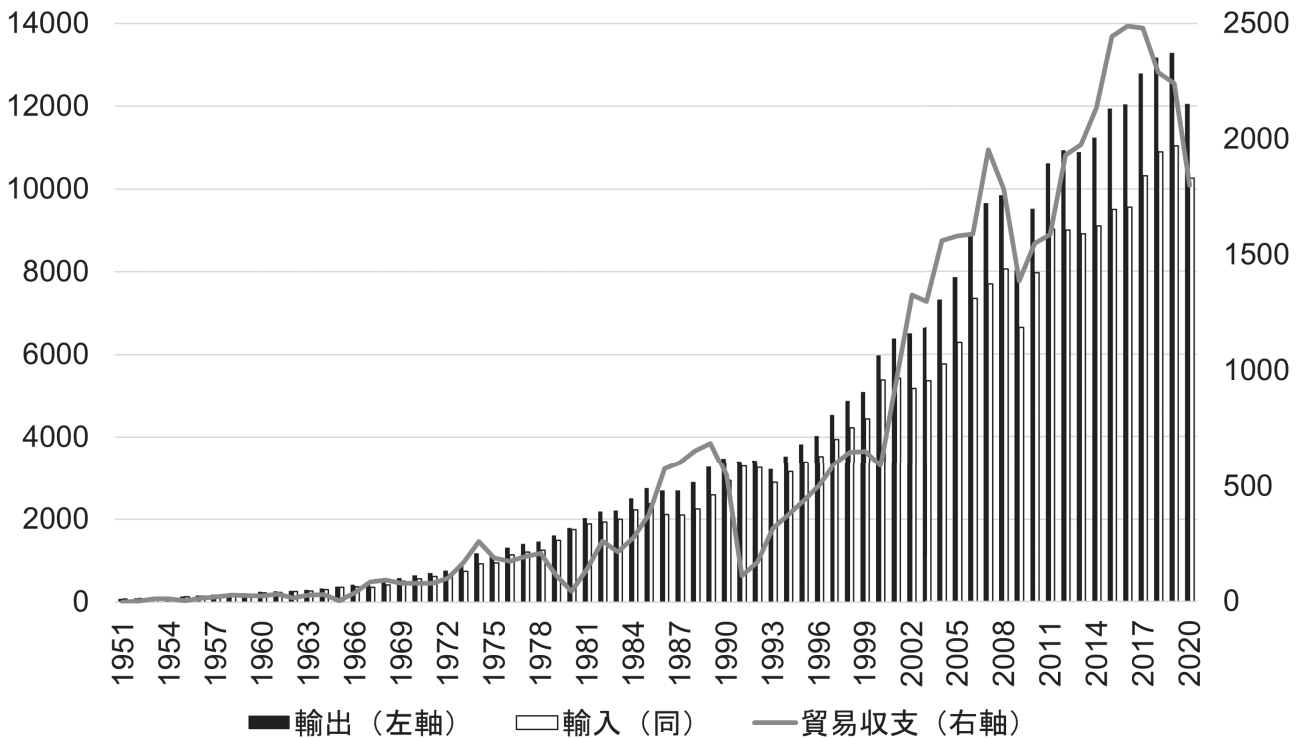
6月下旬には、ロシアが実効支配するウクライナ南部クリミア半島沖の領海を「無害通航」した英海軍の駆逐艦にロシア連邦保安庁（FSB）の沿岸警備艇が2回にわたって警告射撃し、さらに長距離戦闘爆撃機が爆弾4発を投下して警告爆撃を行う“事件”が起きた。

ウクライナ海軍と米海軍は6月28日～7月10日、黒海で毎年恒例の軍事演習シーブリーズを実施。NATO同盟国とパートナー32カ国、5千人、軍艦32隻、航空機40機、18の特殊作戦・潜水チームが参加する。米軍の発表ではフランスやイタリア、日本や韓国も含まれているのにドイツの姿だけが見当たらない。

ベルリンの壁崩壊の陶醉感

第二次世界大戦で敗戦国となり戦後、日本と同じように平和主義国家として奇跡的な復活を遂げたドイツは1989年のベルリンの壁崩壊、東西ドイツ統一、EU発足と拡大という陶醉感を引きずっている。冷戦が終わり、関与政策によって中国やロシアがいずれ自由主義陣営に融合するという幻想をいまだに懐き続けているのかもしれない。

ドイツの貿易黒字（億ユーロ）



出所：ドイツ連邦統計局

東西ドイツ統一で貿易黒字はいったん激減したものの、その後、EU発足・拡大でどんどん膨れ上がっている。

旧東ドイツ出身のメルケル首相は07年、独首相として初めてチベット仏教最高指導者ダライ・ラマ14世と会談。これが中国の逆鱗に触れ、対中輸出は激減。媚中派ゲアハルト・シュレーダー前首相（社会民主党）に批判された。以来、メルケル首相は「経済優先」となり、首相としての訪中回数はシュレーダー氏の倍の12回に達している。

おかげでメルケル首相の16年間で対中輸出は5倍以上に膨れ上がった。しかし中国に依存しすぎたことでドイツ産業界の反省や警戒感は強まっている。中国に進出したドイツ企業は現地で合弁会社を設立することを求められ、技術移転を強制される。中国企業はドイツ市場に自由に参入できるのに、ドイツ企業の中国市場参入は制限されている。

16年には産業用ロボット世界大手の独クーカが中国家電大手の美的集団に買収された。これをきっかけに、中国の買収意図をいぶかる声が強まり、中国の投資を事前にスクリーニングする仕組みが強化された。ファーウェイの次世代通信規格5Gについても今年4月に法整備が強化され、ファーウェイの参加こそ禁じられなかったものの、高いハードルが設けられた。事実上のファーウェイ外しと言っていい。

一方、独自動車メーカーは国内より中国でより多くの自動車を販売する。ドイツの中国依存症はもはや手の施しようがないところまで進行しているのが実態だ。ベルリンの壁崩壊の陶酔感に浸りながら実は経済を優先するという「現代ドイツ重商主義」でどこまで貿易黒字を積み上げるつもりだろう。この流れはラシェット氏が首相になっても大きくは変わらない。風刺画の黒鷲は正確に描かれていると言えそうだ。

